ご自由に「感想」をお書きください。
有意義な時間をどうもありがとうございました。 島田先生のお話やさまざまな背景を持つ参加者の皆さんとのディスカッションを通じて、「日本語教育の参照枠」への認識が変化していきました。日本語学習者にしても、日本語教師にしても、さまざまな人、グループ、コミュニティーと繋がるということが１つの重要なキーワードであるように思いました。今後の自分の日本語教育や教師養成に落とし込んでいきたいと思います。
「日本語教育の参照枠」の説明部分には具体的なメッセージと意気込みが込められていると感じました。そして現場の講師には、それらを咀嚼して各々の状況に応じて授業をデザインする力が求められていると思いました。また、今回同じグループで話し合った方々も皆異なった分野で日本語を指導されており、講師の多様性、多様化を実感しました。
参照枠について自分で読みこんでみたことの理解の確認できてよかったです。またいろいろな場数を踏んでおられる方々との経験談や考えのシェアがとてもためになりました。ステキな方々とごいっしょでき、嬉しく思いました。ありがとうございました。 　よりよき社会を目指しての文化庁をはじめとする諸関係者の皆様方の取り組みに感謝申し上げるともに、今後の進展にも大いに興味（特にpreA1）を持って、自分なりにも取り組んでいきたいと思っております。本日は本当にありがとうございました。またの機会がございましたらよろしくお願いいたします。嶋田和子先生にもいつも同じ言葉ながら、心より感謝申し上げます。
日本語教育の参照枠について、CEFRとの比較などわかりやすく解説していただきましたが、自身がより深く理解するためには一次資料を読み込むことが必要だとも感じました。 今後日本語教育以外の場で参照枠がどう広がっていくのか注目していきたいと思います。
CEFRと参照枠の関係と、どこまでが参照枠として提示され、具体的な部分は現場に任されるという考え方がわかりました。具体的な部分の質の保証をどのようにするのか、その能力評価をどのようにするのか明らかにする必要があることが今後の展開に必要なのではないかと感じました。またカリキュラムの構築力と運営力がないと生かされないのではないかと思いました。複文化の部分を補遺版の検討でどのように補うのかなど、現在進行中のワーキンググループの検討結果も気になりました。島田先生、長い報告書をわかりやすくかみ砕いてご説明いただき、感謝申し上げます。嶋田先生、タイムリーな勉強会を企画していただきありがとうございました。
島田徳子さんのご講義はもちろんのこと、グループでのみなさんのご意見からも、たくさんの学びをいただきました。貴重な機会をいただきありがとうございました。
昨日はありがとうございました。時間が限られた中だったからこそ、エッセンスの感じられる実り多い時間となりました。「民」が「移」することが当たり前になっているこの時代に、移民政策をとらない日本でCEFRを採用することの矛盾が気になっていましたが、その問題意識を委員の皆様も共有していらっしゃることがわかり、安心いたしました。 ディスカッションでお伝えしたことに少し付け加えさせていただきますと、やはり「評価」ということが大きなポイントになると思います。「日本語能力が足りない」、「テニヲハが使えない」、「敬語が使えない」、「感じがわからない」などなど、母語話者による一方的な、何の基準も持たない評価により、日本語を母語としない住民が学習や就労、生活の場を奪われている現状があります。反面、人の移動がより盛んになる現在、日本社会は通過点に過ぎないというケースも多くなるでしょう。望むと望まざるにかかわらず来日する"移民"の存在がディスカッションで触れられていましたが、それは日本を離れるのも同じことです。 CEFRを採用する理由・意義はまさにここにあり、国境・言語圏を移動しても、自身の複言語・複文化能力を評価できる参照枠の存在は非常に有意義だと考えています。だからこそ（文脈化は必要だと思いますが）「日本語能力の参照枠」がガラパゴス化せず、理念も含めて導入され、それが日本社会の変革の嚆矢となることを願っています。
今回のワークを通じて、いっきに理解が深まったように感じました。それはおそらくこれまでは全体をざっくり理解していたけれども一つひとつの表現に注目して、何が目指されているのか、CEFRと比べてどのような特徴があるのかをきちんと考えてこなかったからだと思います。ありがとうございました。
色々な解釈ができる日本語教育の参照枠や、CEFRについて、他者と語り合うことで一人では得られない知見を得ることができました。今度は、自ら取り入れたり、実際の活用例を色々伺ってみたいと感じました。皆様本当にありがとうございました。

貴重なお話を、ありがとうございました!　はじめは、資料を読んだり、先生のお話を聞いたりするのが追い付かなかったのですが、BORでグループの皆さまと確認でき、ついていくことができました。「『日本語教育の参照枠』を参照することにより期待される効果」はこれからの各機関の努力にかかっているような気がします。そのためにもこのようなファミリアライゼーションの機会を多く設けていただけたらと思いました。
このような学びの機会をつくっていただき、島田先生そして嶋田先生、本当にありがとうございました。 CEFRと日本語教育の参照枠の違いが分かったことがいちばん参加してよかったと思う点ですが、これを一般の日本社会の中にどのように広めていくかがいちばん重要な点であると思いました。 地域の日本語教育に関わっていると、行政にも一般の日本社会にも「日本語教育の必要性と専門性」自体がまだまだ理解されていないと実感しています。 日本語教育の参照枠も含め、現在進められている国の様々な施策によって、日本語教育という分野がより広く知られていくよう、自分自身も活動を続けていきたいと思います。 とても分かりやすく、またグループ内での議論も深められた学びの場でした。ありがとうございました。
島田徳子先生、ご一緒いたBORの方々からも、大変勉強になるお話を伺えました。参加するにあたって2つの問いがありましたが、そのうちの１つ「日本語教育の参照枠はなぜ国内外の日本語教育の質向上につながるのか」ここがとても気になっていた投げかけでした。 これがきちんと言語化され、さまざまな場とレベルの日本語教師に共有されてこそ、いろいろな立場で日本語を「学習」する方々のためになるのだと思います。そして、これは「今」のあり方でこの先も日本のあり方や言葉のあり方多文化共生の様相など取り巻く環境の変化に応じて、その方の過ごす場の変化によって変わる続けていく部分と芯となるものが共存していくのだと思います。 さまざまな理由、立場、希望、必要性から学習している日本語学習者の方それぞれにその方の望む居場所に近づいていっていただけたら、その中で生き抜いていっていただけたらと日本語教師になってから、あえて様々分野の日本語教育に関わりながら感じた生の気持ちと重なる今回の寺子屋でした。 嶋田先生、島田先生、ご一緒した参加者のみなさま、本当にありがとうございました。
島田先生、嶋田先生、参加者の皆さま、ありがとうございました。 今までちゃんと「日本語教育の参照枠」を理解したいと思っていたのですが、なかなかその機会がありませんでした。今回、島田先生のお話、参加者の方々との話し合いで、自分の中で理解を少し得ることができました。いちばん印象的だったのは、2番目のブレイクアウトルームでの「これからの日本語教育の専門家に期待される専門性」の話し合いでした。今回、「日本語教育の参照枠」ができたことで、期待される教師像などが浮かび上がってきたように思います。話し合いの中で、今、行われている教師養成がこの現状に合っているのかという指摘があり、考えさせられました。「日本語教師」と一括りに考えるのではなく、グループの話し合いにあった「〇〇日本語教育」の専門家のような感じで、教師養成を広く考えていくことができたらいいのではないかと思いました。
一人読んではいたものの、消化不良のまま距離を感じていた参照枠。今回の講座で、皆さんとの対話を通して少しお近づきになれた気がします。今日の学びを自分の職場に持ち帰り、仲間との対話につなげ、さらに理解を深めることができたらと考えています。貴重な機会をありがとうございました。
島田先生のお話を伺い、日本語教育参照枠について学び、さらに、皆様とのディスカッションや発表を通して様々な気づきがあり、理解を深めることができました。特にCEFRと日本語参照枠の違いについてのディスカッションは、それぞれの観点から話し合うことができ、先生からの補足やコメントも伺うことができたので、非常に有意義なものでした。貴重な機会をいただき、ありがとうございました。大変勉強になりました。
参加者の皆さんと日本語教育の参照枠について、2つの問いを考えることで活発な話し合いができ、有意義な時間を過ごすことができました。配布資料をもう一度読み直して、皆さんの意見を思い出しながら、今後も考えていこうと思いました。ありがとうございました。
日本語教育の参照枠と欧州評議会のCEFRについてブレークアウトルームで議論することにより違いが見えてきました。日本語学習者の視点に立ち、目的に沿った日本語能力が向上するように伴走していこうと思います。
グループでのディスカッションを重ねることによって、考えが深まった。貴重なインプットをしていただいた後でアウトプットをする大切さを今さらながらに実感した。言語習得には、色々な背景があり、時代の変化によって習得の目的や方法などが変わってくるということ。その流れを理解し実践していく難しさもひしひしと感じた。これからの日本語教師は、ミクロではなくマクロに物事を捉えていく必要性があるのではないかと思った。貴重な機会をありがとうございました。

貴重な機会をありがとうございました。島田先生のお話しは大変わかりやすく、具体的にお話しくださったことで「日本語教育の参照枠」のの意義や役割についての理解が深まりました。感謝いたします。同じグループの皆様も様々な視点からのお話しがあり、勉強になりました。 様々な対象者に携わるようになってから特に「日本語教師の専門性って？」という問いを強く持っていました。研修を経て「日本語を使う皆さんがよりよく生きているために何をすべきか、何ができるのか」考えることができることが専門性であると、自分の考えを後押ししていただいた気分です。共に社会で生きるものとして、つながりを促し、つながり続けていく、支援を続けたいと思います。
今回は、CEFRと日本語教育の参照枠の違いに焦点を当てて、言語化できたので、頭の整理になりました。本当にありがとうございました。 以下、個人的な意見です。わかりにくいかもしれません。すみません。 「学習者、教授するもの及び評価者が、外国語の熟達度を同一の基準で判断」できるという点は、わりと認識されている点だと思います。しかし、教師がどう評価するかという評価に目がいき、さらには、一部では教師が学習者能力を判定しているような気持ちになっていないかという懸念を持っています。学習者が自ら評価（自己評価）するための材料として、教師の評価も参考に、という目線が薄いように感じています。言語学習が学習者主体であるのであれば、「教師の評価」は、学習者が自ら、「学習項目に関する他者からの評価」として参考にできるといいのではないかと個人的には感じます。CEFRの自己評価は、単に言語学習の能力だけの評価ではなく、人間としてのもっと広い範囲の評価であると理解しています。私は、「教師は学習者主体の学習の手伝いをしている」点を忘れないように、これからも日本語教育に取り組んでいきたいと感じました。 また、気になっている点は、日本語教育の参照話で述べられている「言語の習得」は「より深く社会に参加し、より多くの場面で自分らしさを発揮できるようになるための手段」としている点です。ここで考えたいのは、日本語を母語としない方々が何をしたいのか、どのような日本語を習得したいと望んでいるのか、望んでいる日本語教育を受けることができているのかどうか、という点です。個人的な意見ですが、「個々が望む社会参加に必要な日本語が習得できる」という手伝いができているのであろうかと考えます。「多文化共生」とともに語られる日本語教育（日本語支援）と、日本語教育の参照枠がどのように関連するのか、様々な視点で日本語教育を捉え、必要な日本語学習を応援する体制が整えられることが理想では無いかと思います。日本語を母語としない方々にとって、自分の意思でどれくらい社会に参加したいと考えるのか。考えた参加ができる社会となっているのか。その両面から考えていく必要性を感じます。そして、「より深く社会に参加すべき」という視点ではなく、「より深く社会に参加」したいという気持ちになってもらえる社会づくりのお手伝いをし、学習者に寄り添った日本語学習ができるように応援していきたいと思っています。
10年ほど前にJFスタンダードと新しいJLPTとセットで出会い、学習者のレベルを「できる」ことに注目して評価することを知った。それからヨーロッパ参照枠CEFRを知り、この度のテーマとなった「日本語教育の参照枠」に出会った。 多文化共生社会に向かう中、日本語教育の内容も多様化しているが、学習者の到達目標として、教師の授業内容、評価内容を決める際も、大いに参考になることがわかった。 CEFERの複言語主義の知見は含まれていないようにも思うが、海外につながる子ども、帰国子女の日本語教育には生かされるようにも思われるものの、日本語教育参照枠が成人に当てはまるものであることも理解できた。 日本語教育に関する推進法から始まった文化庁の取り組みが、どのような学習者をも取りこぼすことなく、日本での生活が実り豊かなものになるために、日本語教育参照枠が機能してくれるといいと思う。
「日本は複言語・複文化主義の国なのか」というところで、立ち止まっているわけではないが、そこから考えてたいという方がわたし以外にもいらっしゃったのが意外でした。膨大な文字数、内容の「日本語教育の参照枠」のどの部分を意識的に選択し、活用（あるいは実践）するかが大切だと感じました。
日本語教育の参照枠について、CEFRとの違いも含めてとても勉強になりました。今まで漠然とした理解であったのですが、今回の研修に参加したことではっきりしてきたように思います。 私たち一人一人ができることを考えるにあたって、大枠の方向性にも注意を払う必要があると痛感しました。年末の休みに、手引きをまた読み込みたいと思います。ありがとうございました！ 感想提出が遅くなり申し訳ありません。

今回も実り多い学びをいただきました。ありがとうございました。ヨーロッパの言語指標であるCEFRと日本語教育にその考えを応用し、反映した日本語CEFRの命題を前に、まず考えたのは、”一体、言語は何のために？”ということです。母語にせよ外国語にせよ私たちは何を目的として学び、何に関わっているのか。置かれている人それぞれの理由があるはずですが集約するとそれは“命を生き抜くために”ということではないかと思えるのです。思い返せば大学院の修士論文のテーマとしてCEFRの情報を収集しているとき、偶然にこのアクラスの勉強会で細川先生をインストラクターとしてCEFRの講義があることを知り、初めてアクラスに参加させていただき、それ以来、自身に問い続けてきました。言語がコミュニケーションを図るためのものであるなら対象言語を完璧なものにする必要があるのか、というよりも完璧な状態を待たなければコミュニケーションをとることができないのか。CEFRは、有限な時間において、多様なシチュエーションと目的が絡む中で躍動する言語の在り方の捉えに光を与えたと感じました。しかしその観点に立つと日本語CEFRのそれは背景や成り立ちが異なっています。複数言語内の流動性や等位性がなく、日本語に特化した一言語内の熟達度の指標にとどまってしまう側面は免れないからです。しかしJLPTは相変わらず日本語習得のための大きなテストとして存在して多くの外国人が得点を目指して勉強に励んでいるように、日本語以外の各言語も同様に自国の言語習得の知識や文法に深く根ざしたテストを実施しています。その点から日本語CEFRを設定したことは意味があったのではないかと思います。言語を教える立場では、こういう言語習得の目的や状況を柔軟に捉えた複数の指標の利点を十分に理解して学習者に有用な学びを提供し、自身も発展途上の言語の使い手という自覚を持って学習者とともに歩んでいくことではないでしょうか。